

近年医療データのデジタル化によって、患者と医師、医師と医師が情報を共有できるようになりました。また、モバイルICTやクラウドを活用して、CTやMRIなどの機器と接続することで、遠隔診断や相談もできて、患者の負担が軽減されてきています。

例えば、最近いところに赤ちゃんが生まれましたが、話を聞いたところ、地域によってはすでに母子手帳のデジタル化が進み、赤ちゃんの健康管理のほか、自治体からのお知らせもスムーズに受け取れて、複雑な予防接種のスケジュールの予定が立てやすくなったということです。

同様に携帯電話の普及によって、様々なアプリが開発されて、患者自身が健康への関心を高め、健康管理に努められるようにもなっています。体温や血圧、脈拍などのバイタルデータや食事内容、運動量をアプリに入力することで、病気の予防や体調管理に役立っています。

その一方で、いとは医師と面談できたおかげで、色々な疑問が解決できて出産への不安がなくなったそうです。また、看護師に「大丈夫ですよ。」と優しく声をかけられたことで、とても安心したと話してくれました。行政が提供してくれるマタニティ教室への参加や、同じマンションの妊婦さんとの何気ない会話でずいぶんと心が和んだと言います。

この話を聞いて、きめ細かな地域医療を目指すためには、まずコミュニケーションが大切になってくるということがわかりました。医師は患者やその家族の置かれた状況を把握してそれに合わせて、地道に治療にあたる必要があります。それにはじっくり話を聞いてあげることのできるアナログ力が必要です。いくらデジタルデータを積み上げ、デジタル機器を介しても医師が信頼を得ることは難しいと思われます。患者は、自分の症状をわかってくれて、相談にのってくれる医師を求めているのです。

次に、アナログ的な地元住民のネットワーク作りが必要になると思いました。顔の見えるネットワークです。患者にとっては医師のみならず、看護師や薬剤師、地域の保健師との連携やコミュニケーションが大事だと思います。これはデジタル化が進んでもAIが活用されても、それらにはとってかわることのできない部分です。医師は病気を治すだけではなく、病気にならないための予防や回復後のリハビリに至るまで、患者に寄り添うネットワーク作りが求められています。こうしたネットワークを地域にたくさん作っておいて、いつでも患者に提案できれば患者もその家族も安心できると思います。

このように、地域医療はデジタル部分の発展と、コミュニケーション能力のある医師が構築するネットワークというアナログ部分が共存してはじめて推進されるのではないかと思います。デジタル時代の地域医療とは、アナログ力が鍵であると考えます。